

III-9 骨格筋量の推移からみた胸腔鏡下食道切除術の有用性の検討

○原 裕太郎 室谷 隆裕 和嶋 直紀 久保 寛仁
吉田 枝里 袴田 健一
(弘前大・院医・消化器外科学)

【背景】胸腔鏡下食道全摘術は開胸手術と比較して出血量や呼吸器合併症が少なく、低侵襲であるとされている。筋肉量、栄養指標の推移から胸腔鏡下食道全摘術の有用性を検討することを目的とした。

【対象と方法】2014年から2017年の間に食道癌に対して食道全摘術、3領域郭清を施行した77例(開胸群59例、胸腔鏡群18例)を対象とした。筋肉量は術前、術後3ヶ月時のCT画像を用いて、第3腰椎レベルの腸腰筋面積を測定し、身長で補正したPsoas muscle mass index(PMI)を算出した。栄養指標にはControlling nutritional status score(CONUT score)を用い、開胸群、胸腔鏡群の2群間での手術成績とともに、PMI、CONUT scoreの推移を比較した。

【結果】対象症例の平均年齢は64.1歳、男女比71:6であり、2群間(胸腔鏡群 vs 開胸群)の比較検討では手術時間は458分 vs 449分($p=0.606$)と差は認めず、出血量は481ml vs 679ml($p=0.008$)と胸腔鏡群が有意に少なかった。Clavien-Dindo分類においてGrade 2以上の術後合併症は胸腔鏡群で呼吸器合併症が2例(11.1%)、開胸群では18例(30.5%)、であり、胸腔鏡群で呼吸器合併症が有意に少なかった($p=0.020$)。術後3ヶ月時のPMI減少率は2.77% vs 9.26%($p=0.001$)、CONUT scoreは術後1ヶ月時1.75 vs 2.38($p=0.049$)、3ヶ月時0.67 vs 1.64($p=0.013$)であり、胸腔鏡群で筋肉量の減少が抑制され、栄養状態の低下も抑制されていた。

【まとめ】栄養指標、体組成の観点からも胸腔鏡下食道切除術の低侵襲性、有用性が示唆された。